

国境を越えた親善の輪

—南部敦子さんの功績を偲ぶ—

十八回生 寺澤 美代子

平成二十年九月八日付で千里山会事務局に届いた一通のメールが発端となつて、私達は同窓の十八回生南部敦子さんが、半世紀以上も前にマニラで果たされていた国際親善の功績について、初めて知ることとなったのです。そのメールというのは、城西国際大学アマデオ・アルボレーダ教授が、南部敦子さんに関する情報を求めてネット上で探して居られた折りに、たまたま千里山会誌創刊号の滝沢万里子さんの記事「南部敦子さんに捧ぐ 忠平様を偲びつゝ」に巡り合われた結果、事務局に連絡して来られたものでした。

千里山会会員の多くの方々がよくご存じと思います。南部敦子さんは昭和九年十月五日生まれ。南部忠平・久子ご夫妻の一人娘として、両親の愛情を一身に受けて育たれ、昭和十六年春に千里第二国民学校に入学、昭和二十二年春の卒業後は、京都の光華女子学園に進学、中高短大と進まれるうちに陸上短距離界のエースとして活躍されました。女子五種競技での四度にわたる日本記

録の更新、昭和二十九年のアジア大会(マニラ)での百米走優勝などの輝かしい記録を残されており、同級生みんなが誇りとする方でしたのに、大変に悲しく残念なことに、昭和四十五年、突然起きた無過失の交通事故で幼いお二人のお子様を残してお亡くなりになったのです。



アルボレーダさんより送られてきたメールの内容は次のようなものでした。

『南部敦子さんに関する情報をインターネットで探し求めていた折りに、たまたま千里山会のホームページ

アルボレーダさんから滝沢万里子さん（千里山会）に当てた最初のメール

差出人 : Amadio Arboleda<aaarboleda@gmail.com>
題名 : 滝沢万里子様へのメッセージ
宛先 : qvd03137@nifty.ne.jp
送信日時 : Mon 09/08/2008 21:54:04 JST

Dear Ms. Takizawa,

While searching for information on the Internet about Nambu Atsuko (南部敦子) by chance I found the tribute (...に捧ぐ) you wrote about her on the 千里山会 home page.

Please let me explain why I am writing to you. I met Ms. Nambu while I was a student at the Ateneo de Manila University in the Philippines and she was a member of the Japanese team in the Second Asian Games in 1954 in Manila. My schoolmates and I, and many other Filipino students, thought she was the symbol of the new Japan after the war. We went to see her in all the events she appeared in. I can say that she was the most popular athlete for all of us at that time because she was the same age and so very good as an athlete and person. Fortunately, we were able to greet her and enjoy her very nice smile.

I am Filipino-American. I was born in New York in the same year as Ms. Nambu. My father sent me to the Philippines in 1948 for high school and university that is why I had a chance to see her. After university I returned to the United States for graduate school. I did not hear anything more about Ms. Nambu.

In 1969 I was invited to come to Japan to work for the University of Tokyo Press (東京大学出版会). In the following year I read in the newspaper that Ms. Nambu had been killed in an automobile accident. It was really a very big shock for me. The young woman that hundreds of Filipino students had admired as the symbol of new Japan was gone. And even though I had come to Japan and was planning to look for her I realized I would never be able to see her again. It was very sad and I was so sorry to about her death.

I wish I could have sent condolences to her family after her death but I did not know how to do it.

Can you tell me, is there any place to find a photograph of her during the Asian games?

Sincerely yours,

Amadio Arboleda

アルボレーダ・アマデオ
教授 城西国際大学大学院人文科学研究科
千葉県東金市

に記載されていた彼女に対する追悼文を見付けました。
何故私がこの手紙を書いているかを説明致しましょう。一九五四年マニラで開催された第二回アジア大会出場日本チームの一員であった南部敦子さんにお会いしたとき、私はフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学の学生でした。私や私のクラスメートをはじめ、その他の多くの学生たちには、彼女が戦後の新しい日本のシンボルであると思え、我々は、彼女が出場するすべての競技を見に行きました。彼女が我々と同じ年頃であり、選手としても個人としても大変に素晴らし方でしたから、彼女は当時、我々の中で最も人気のある選手だったと言うことができます。彼女を迎え、彼女の素敵なほゝ笑みに接することができたのは、幸運なことでした。

私は、彼女と同じ年にニューヨークで生まれたフィリピン系アメリカ人です。一九四八年に父が高校と大学教育のために、私をフィリピンに送ったので、私は彼女にお会いする機会を得ることができたのです。大学卒業後私は、大学院への進学のために米国に戻り、それからのちは、彼女について何か情報を得ることはありませんでした。

一九六九年、私は東京大学出版会の仕事で日本に招へいされました。その翌年、私は新聞で南部敦子さんが交通事故で亡くなったことを知り、大変なショックを受けました。何百人ものフィリピン人の学生達が、新生日本のシンボルとして敬愛したあの若い女性が無くなられたのです。私は、日本に来て彼女を探したいと願っていましたが、もう再び会うことができなると覚り、大変に悲しく、非常に残念に思いました。

お悔やみの気持ちを、彼女のご家族にお伝えしたいと願いましたが、私にはどのようにすればよいのか分かりませんでした。
アジア大会のときの彼女の写真を見付けられる場所をどこかご存じでしたら、お教え下さいませんでしようか。敬具

アマデオ・アルボレーダ

メールの原文を次ページに掲載致します。

事務局奥田さんよりメールの転送を受け、アルボレーダさんへの対応を任された私にとって、その後の展開は、まさに、敦子さんのお力添えによると思えるような幸いな出会いが重なっていったものでした。

まず、メールの転送を受けた数日後には、数年ぶりに千里山を訪ね、友人宅に泊めて頂く予定がありましたので、その折りに、南部さんのお宅をお訪ねし、幸いにもご在宅だった久子様にお会いすることができたのです。小学生的頃から、久子様のことを「南部さんの小母様」とお呼びして親しみ、私の母も謡の趣味を通じて久子様と親しくさせていただいていた間柄でしたので、普通りの小母様の笑顔に接した時には、昔の思い出と共に、懐かしさ一杯でした。

しばらくは昔話に花を咲かせたものの、敦ちゃんの違いに触れることは、小母様に悲しみをよみ返えらせることになるのではとの懸念から、私も躊躇する気持ちでおりました。しかし、小母様の近況を伺ったのち、敢えてアルボレーダさんから届いたメールの一件をお伝えしましたところ、次のように話されたのです。

「敦子のことを半世紀以上もの長い間、記憶に留めていて下さったとは、本当に有難いことです。敦子の思い出に触れたり語ったりするのが辛い時期も続きましたが、今では、母親が残した功績について、孫達にもしっかりと伝えてはならないと考えていますし、伝えていくのは、私の責務だと思っています。」

小母様が悲しみを乗り越えて、残された二人のお孫様を立派にお育てになり、九十六才になられた今も、普通り

このメールに対して、アルボレーダさんよりすぐさま九月十八日付の返信が届きました。

『千里山会宛の私のメールにご返事下さいまして有難うございました。正直に申して、ご返事が頂けるとは期待しておりませんでした。フィリッピンの若者達が、南部敦子さんに対して感じていた深い敬愛の念を、敦子さんと親しかった方にお伝えする手段を得たこと、そして最終的に、私の心からのお悔やみの念を、彼女のご家族や友人の方々にお伝えできたことで、私としては充分に願いが叶ったと思っております。』

ご想像いただけるとは思いますが、一九五四年当時、まだ多くのフィリッピン人が、日本人に対して強い怒りの念を抱いており、フィリッピン政府も、日本人チームに対して暴力行為が起きないかと懸念する状況でした。我々学生でさえ(憎しみと親しみのような)両面感情を抱いておりました。しかしながら日本チームの若いメンバーの方々は、みんな素晴らしく、二つの国の若者達の間の絆を認める雰囲気を作り出すのに役立っておられました。中でも敦子さんの存在は、際立って見えました。

長年の戦争のあと、当時の多くの若者にとって、平和と

の笑顔で元気な日々を過ごされていらっしゃるお姿に、言い知れぬ深い感動を覚えておりました。お孫様方もそれぞれに、お幸せなご家庭を持ち、堺と千里山のお近くにお住まいのご様子も伺いました。

東京に戻って直ぐに、千里山会の事務局よりの返信メールをアルボレーダさん宛に(九月十六日付)お送りしました。返信文ではまず、先に頂いたメールに対するお礼を述べたあと、千里山会の説明を加え、次に、千里山にお住まいの敦子さんの母上久子様をお訪ねできたこと、アルボレーダさんが伝えてくださったメールの趣旨とお悔やみの言葉に、久子様が大変感激しておられたことなどをお伝えしました。更に久子様については、忠平氏と共に二人のお孫様を立派に育てられ、一九九七年に忠平氏が亡くなられてからは、お一人の生活になられたもの、同じ敷地内に、お孫様のお一人がご家族とお住まいになっておられるなど、九十六才になられてなお、お元気な近況をお伝えし、一九三二年のロスアンゼルスオリンピックの三段跳で優勝された忠平氏の偉大な功績についても書き添えておきました。最後にアジア大会の写真については、大きな公立図書館で関連の雑誌も見付かるのではないかとお伝えしました。

ということが最も重要なことでした。日本チームのメンバーの方々とお会いしたあと、私達は、永久の平和というものが可能であると考えるに至りました。

敦子さんの母上からのお言葉を伝え聞いて、当時同じ年頃だったフィリッピンの同世代の者たちのためにも、お悔やみの気持ちを南部家の方々に伝えるという仕事を、長く遅れてしまっていました。どうにか果たせたと感じ、ご尽力に感謝しております。敦子さんが我々に残して下さったことを決して忘れることはありませんが、我々の言葉が、彼女のご家族の耳に届いたと知って、今私の気持ちは楽になっております。

もちろん私は、敦子さんの父上南部忠平氏の偉大な功績について、前々より存じております。ほかの誰も成し得なかつたときに、アジア人としてオリンピックで優勝なさったのですから、忠平氏は、多くのアジア人にとってのヒーローでもあるのです。

助言に従って、アジア大会での敦子さんの写真を図書館で探して見ることにします。私は、アテネオ・ダ・マニラ大学の同窓生に、それらの写真を、敦子さんを偲びご冥福をお祈りして使うように提案させていただくつもりであります。

千里山会からの返信に対するアルボレーダさんからのお礼のメッセージ

差出人 : Amadio Arboleda<aaarboleda@gmail.com>
題名 : Re: 滝沢万里子様へのメッセージ
宛先 : Yoichi Okuda<qvd03137@nifty.ne.jp>
送信日時 : Thu 09/18/2008 21:43:43 JST

Dear Mr. Okuda,

It was very kind of you indeed to respond to my message to Senriyama-kai. To be honest I did not expect to get a reply. It was enough for me that I had some way of expressing to someone close to Ms. Nambu the deep appreciation that young people in the Philippines felt toward her and that I could finally express my sincere sympathy to her family and friends after her tragic death.

As you can imagine, many Filipinos still had strong feelings of anger toward Japanese in 1954. The Philippine government was very worried about the possibility of violence against the Japanese team. Even we students were very ambivalent. However, the young members of the Japanese team were all wonderful and helped to create an atmosphere that allowed a bonding between young people of both countries. Among team members, we thought Atsuko Nambu was the best.

As with many young people at that time peace was the most important thing after years of war. We thought lasting peace was possible after meeting the Japanese team members.

Your words about Atsuko's mother made me feel that I had managed to complete the long delayed task of expressing condolences to the Nambu family on behalf of a generation of Filipinos who were her age when she went to Manila. I am most grateful to you and Ms. Terazawa for that. I will never forget what Ms. Nambu left for us, but now I can rest easier knowing that my words have reached the ears of her family.

Of course, I long knew about the wonderful achievements of Mr. Nambu, Atsuko's father. He was also a hero to many Asians because he could win in the Olympics as an Asian at a time when others could not.

I will follow your suggestion and visit a library to search for a photo of Ms. Nambu during the games. I will suggest to my fellow alumni at the Ateneo de Manila University that we use the photos in a tribute to the memory of Ms. Nambu.

Once again, thank you very much for your kindness and sincere greetings to Mrs. Nambu and Mrs. Terazawa.

With best regards,

Amadio Arboleda
Josai International University

す。

もう一度あなたのご親切にお礼を申し、南部久子様
心よりのご挨拶を申し上げたく存じます。敬具

アマディオ・アルボレーダ 城西国際大学

メールの原文を次ページに掲載致します。

アルボレーダさんとの一連の交信内容を詳しく久子様
にお送りしていただきましたことから、話は思いがけない展開を
見るようになりました。

南部忠平氏が長年毎日新聞に勤務されておられたこ
とから、親しくして居られた新聞社の方が訪ねて来られ
た折りに、久子様が交信内容を見せて一部始終を伝えら
れたところ、その方がすぐに手配されて、「陸上競技十二
月号」(講談社)の頁を飾ることとなったのです。新聞社の
方が、敦子さんの写真も拡大コピーして久子様のもとに
届けて下さっていたので、その写真と発売前の雑誌とを、
昨年十一月の千里山会総会に千里山からご出席下さっ
た十五回山本平八郎さんが、久子様の依頼を受けて会場
にご持参下さいました。ここでも幸運な出会いが重なり、
感激を覚えたことは、言うまでもありませんでした。

「陸上競技平成二十年十二月号」の記事のコピーを次ページに掲載
します。

アルボレーダさんがアジア大会での敦子さんの写真を望
んでおられたことを知っていましたので、届いた写真をどこ
かで手渡せないかと連絡を取り、十一月二十一日東京駅
前の丸善でお会いすることになりました。しかし、お互い
に初対面、ネットで調べたアルボレーダさんの経歴紹介に
あつた顔写真だけが唯一の手掛りで、果してうまくお会い
できるかどうかと不安を感じながら丸善に向かいました。
指定の四階外国図書コーナーもかなり広かったので、どの
方か知らずと伺いながら、お互いに目星を付けて恐る恐る名
乗つての初対面となりました。お茶を頂きながら約一時
間余まりお話ししましたが、五十年余り前のマニラで、ま
だ対日感情の悪い雰囲気の中で果たされた敦子さんの国
際親善の功績について、直接にお話を伺うことは、本当に
感動を新たにするものでした。アルボレーダさんも、お届
けした雑誌と敦子さんの写真を手にして大変に喜んでお
られました。

更にその後、アルボレーダさんがアテネオ・デ・マニラ大
学の間窓生に連絡を取られた結果、一九五四年の第二回
アジア大会当時の様子を伝えるタイム誌を保存している



▲明治神宮競技場（現・国立競技場）で華麗なジャンプをする南部敦子

走って、跳ぶ姿は観客を魅了した。1950（昭和25）年の第3回インターハイに1年生で登場した時に、サラブレッドとして話題になった。足の速さは小学生の頃から。その「走り、にいち早く目を留めていたのが、光華学園の小池良一（2008年4月号参照）である。知己の間柄だった父・忠平に「敦ちゃんは私が仕立てるから」と、光華中への進学を勧めた。が、忠平は娘に陸上をさせる気はまったくなかった。「天才ジャンパー」と謳われた忠平だが、人知れぬぬのじむ練習を重ねて結果を出したのだ。「そんな苦勞を娘にはさせたくない。平凡でいい。女らしい生活をさせてくれたら」という親心が強かった。しかし、小池のあまりの熱心さに折れ、敦子は光華学園へ。

天賦の才能を秘め、「敦子は光華学園」が合理的で、無類の勝負強さの武器を備えた敦子が、父と同じように徹底して陸上に打ち込んでいたら——。ところが「あまり練習に打ち込んでいなかった。欲もなかった」（久子）。敦子の胸のうちは「父の血を引く、とか、「サラブレッド、などと言われたくない」という思いがあったのだろう。昭和30年代に入って間もなく、さっさとスパイクを履いてしまった。

第一線を退いた後は、解放されたかのようにボウリングに打ち込み、ここでもプロ並みの腕を見せた。佳人薄命を惜しむ声は今なお強い。（文中敬称略）

アツちゃんの母はマスターズ選手

「アツちゃん」のニックネームで誰からも親しまれた南部敦子。この名前は「敦子」の「あつ」と、中学生の頃から師匠を理し、「あつ」という間に一筆紙に躍り出した「あつ」のもので、と言われた。現役での最も思い出に残るレースは、「民間外交」の大役にもなった第2回アジア大会の「大接戦を制した100m」。

長寿の母・久子は（社）日本マスターズ陸上競技連合の名譽顧問である。「娘の血、を譲り受け、マスターズ陸上の恩恵だ。砲丸投（3kg）・95～99歳の部で2m74のアジア記録を持つ。

陸上つわもの列伝

南部 敦子 Atsuko Nanbu 向日葵のように咲いた一輪の花

戦後の昭和20年代から30年代の初めにかけて、「日本陸上界の名花」と謳われた1人に南部敦子がいる。30数年前に不慮の交通事故に遭い、不幸にも若くして亡くなった。以後、歳月が過ぎ去ったこの秋、大阪府吹田市に住む母・久子（96歳）に愛娘・敦子にまつわるエピソードが「千里山会」の関係者から届けられた。千里山会とは南部が学んだ千里第二小（吹田市）の同窓生による東京での親睦会を指す。

当の逸話とは、南部が京都の光華短大生として、フィリピンのマニラで1954（昭和29）年に開催された第2回アジア大会に出場した折、あまりの活躍ぶりに同国の国民感情が好転した、というのだ。すでに第二次大戦が終わり、9年の歳月が流れていたものの、フィリピンの対日感情はすこぶる悪かった。この件は日本陸連70年史の同大会の項にも触れてあるが、競技場だけでなく、いたるところで罵声を浴びせられたりした。

こうした事態を方向転換させたのが南部の大活躍だった。100mは12秒5の同タイムの接戦の末、胸の差で勝った。後の200m（予選・25秒3＝日本タイ）、4×100mリレー（2走）、走幅跳の3種目はいずれも2位を確保。一躍「ナンプ」の名前は知れ渡り、ヒロインとして有名になった。

このたび、久子に知らされたのは、当時の話を裏付けするような内容だった。このエピソードを引き出す役割を果たした人物は、城西国際大学の客員教授であるアマデオ・アルブレダである。フィリピン系米国人の同教授はニューヨーク生まれだが、学生の頃はマニラ

▼偉大な父・忠平とのツーショット



方が居られると分かり、その記事を転送して下さいました。そこには、アルブレダさんのお話を裏付けるような敦子さんの功績を讃える記述が見られます。記事の一部をお伝えすると次のような内容です。

『マニラのライザル・スタディアムは、第二回アジア大会の会場となったが、その地は第二次世界大戦中のマニラ解放戦のさ中、日本人が最後の拠点として潜伏していた場所として一部のフィリピン人には忘れられない所であった。しかし、そうした記憶も、日本人選手の競技を讃えるどよめきによって、すぐさま消されることになった。そうした大会出場選手の中のスターの一人が、南部敦子という十九才のすらっとした日本の若い女性（五フィート四インチ、一一六ポンド）だった。彼女は一〇〇米走に優勝し、二〇〇米走と走り幅跳で二位、女子リレーチームの最終走者を務めた。（彼女の父南部忠平は、現在大阪でスポーツ記者をしているが、一九三二年のオリンピック三段跳の優勝者である）』

一九五四年五月一七日月曜「タイム誌」第二回アジア大会の記事より引用。原文は次ページに掲載します。

千里山会の事務局に舞い込んだ突然のメールに始まり、千里山での久子様との再会、アルブレダさんとの交信、新聞社の方へのエピソードの伝達、雑誌「陸上競技」へのエピソードの掲載、山本平八郎さんによる千里山会総会での雑誌と写真のご紹介、アルブレダさんへの雑誌と写真の受け渡しなど一連の展開を顧みますと、偶然と幸運な出会いが重なり、見えない力に助けられた思いを、改めて強く感じています。私はこの間の日々、昔の思い出を懐かしみながら、敦ちゃん存在を身近に感じて過ごすことが出来ました。私達同級生にとつて、敦ちゃんは忘れられない人ですが、今回のことで、彼女は私達の心の中に、より強く生き続けることと思えます。

半世紀以上も前に果たされていた敦ちゃんの国際親善の功績を、長年忘れず手を尽して私達に伝えて下さったアルブレダさんの誠実な思いには、頭が下がるばかりです。直接お会いして心温まる思いをいたしましたし、同世代のフィリピンの方々のご好意にも感謝一杯の気持ちであります。同じく戦争・戦後の時代を経ていくだけに、その思いをより一層強く致します。そして、今にして伝わった敦子さんの功績を、九十六歳になられていた母上久子様にお伝えし、喜んでいただけたいことが、私としては何にも増して嬉しいことでした。

アルボレーダ教授のプロフィールと日本でのご活躍の記録

(グーグル検索による)



Amadio Arboleda (アマデオ・アルボレーダ)

| | |
|-----------|--|
| 職位 | 客員教授 |
| 略歴 | 1956年: Ateneo de Manila University 卒業 1964-69年: American Heritage Dictionary 編集員 69-76年: 東京大学出版会国際出版部編集長 85-96年: 国連大学理事會担当、86-96年: 同大学出版局局長、85-89年: 同大学学長室室長 96年: 城西国際大学人文学部教授、2002年: 同学部国際交流学科長、06年: 同学部副学部長、同学部客員教授、NGO・NPO 支援センター所長、08年: 名称変更により国際人文学部客員教授 |
| 専門領域 | コミュニケーションと文化、出版業歴史 |
| 担当科目 | 国際摩擦とコミュニケーション、出版文化論、日本とアジアの出版文化、国際交流とメディア、国際交流・協力演習 I・II、国際交流研修 [大学院]国際コミュニケーション実務、国際アドミネストレーション演習、国際アドミネストレーション・インターンシップ |
| 研究テーマ | 国際コミュニケーションと文化 |
| 著書・論文 | 「中世中国の豊かな印刷文化: グーテンベルクの先駆者」『本とコンピュータ オンラインジャーナル』2月4日号 2004 (http://www.honco.jp/inter_os/page.php?issue=16) ・The Gutenberg Syndrome: An Illusion of International Research. <i>Journal of Scholarly Publishing</i> Vol. 32, Number 3, 2001 ・Publishing in Japan. In <i>International Book Publishing: An Encyclopedia</i> , New York & London: Garland Publishing, Inc., 1995 ・Philip G. Altbach, Amadio A. Arboleda, and S. Gopinathan (eds.) <i>Publishing in the Third World: Knowledge and Development</i> . London: Mansell Publishing, Ltd., 1985 ・Gaston Petit and Amadio Arboleda <i>Evolving Techniques in Japanese Woodblock Prints</i> . Tokyo, New York & San Francisco: Kodansha International, Ltd., 1977 |
| 学生へのメッセージ | 大学での4年間は、日本人の平均寿命である80年の人生のなかでは、長い期間とはいえませんが、働く年月は、もっと長くなります。だから、楽しんだり友達を作ったりすることと、将来のキャリアと充実した人生のために勉強したり経験をつんだりすることを両立させられるように一生懸命やって下さい。 |

て来て下さり、その勇敢さに驚いたことがあったのですが、もう四十三年ほど昔のことですのでハーツデーという町の名前から、到着時の様子などを鮮明に覚えておられ、今回私と同行して小母様との再会を果たした主人共々ただただ感嘆するばかりでした。

当日は、連絡などお世話下さった山本道子様に加えて二十回の榊山翠さんもお見えになり、久子様を囲んで千里山会にまつわる話題はもちろんのこと、千里山の昔話へと話題は続き、楽しい午後のひとつとなりました。

おいとまする際に、久様様が掛けて下さった言葉は「次に会うのは十月東京よ」というもので、この言葉通り久様のご希望がかない、東京に久様をお迎えするとういう私達の夢が実現しますように念じ、一日も早いご回復をお祈りしたことでした。

久様のお見舞いに伺った筈の私共でしたのに、久様の明るさ、前向きな姿勢から、逆に教えられ見習うことが多く、心より敬服して戻った次第でした。

(平成二十一年六月二十八日記)



南部久子さんを囲んで
寺澤さん・榊山さん・山本さん(平成21年6月21日)